

実践記録 91

第56回新潟県公民館大会
事例発表2



魚沼市生涯学習課 派遣社会教育主事 恩田 知弥

住民参画をめざす公民館活動

1 緒言

(1) 新市における最優先課題とその背景

魚沼市は昨年度(平成16年11月)、北魚沼郡の6ヶ町村が合併して誕生した。合併を1週間後に控えた10月23日(土)に中越大地震に見舞われ、多くの方が被災し、家屋の倒壊や施設の損傷などの甚大な被害を受けた。

その後、19年ぶりの豪雪被害に見舞われたこともあり、魚沼市においては、災害からの復旧・復興に最優先に取り組んでいる。

(2) 生涯学習分野の取り組み

各課から選出された代表によって作られているプロジェクトチームは、現在総合計画の素案を策定している。その中の、教育分野においては、「私たちがつくる新しい学びの町づくり」を基本目標に据え、安心して学ぶ開かれた学校づくりや、楽しく有意義に継続できる生涯学習の環境整備、豊かな芸術文化の振興などについての施策が検討されている。

「楽しく有意義に継続できる生涯学習の環境整備」では、その具体的な施策方針として、子どもからお年寄りまでの社会参加や生涯学習を支援(※1)するとともに、生涯学習の機会を充実(※2)させ、広報誌やホームページなどを活用した学習情報の提供(※3)や図書館・公民館などのネットワーク化(※4)を進めることとしている。図書館や公民館といった既存の社会教育施設をより効率的に・有効に活用することも施策の大きなねらいとして掲げられており、特にこれまで以上に利用者が増加すると考えられる既存施設においては、利用者に利便性を提供できるような方策が検討されている。

(3) 公民館活動の重要性と課題

当市において、住民の利便性や自主的な活動を保証するために、公民館活動は重要な割合を占めているといえる。公民館組織は、旧町村単位の各地区公民館ごとに運営審議会を設置し、中央公民館と連携をとりながら市の方針に従って事業を運営している。現在は、中央公民館事業と旧町村単位の公民館事業が平行して実施されている。住民の利便性やサービスの提供は大きな課題であるが、人的・物的な効率性を考え、今後一層の事業精査を行っている必要がある。行政主導の事業運営を住民の主体的な事業に高めていく上で、住民の参画は大きなキーワードといえる。公民館事業において、住民の参画をどのように位置付けていくかについて魚沼市の事例を紹介する。

2 魚沼市公民館事業

(1) 中央公民館事業

継続事業や合併後の新市の課題をとらえ新規に立ち上げた事業から、緒言で述べた重点方針を具現化する方向で取り組まれているものについて、その事業内容と住民の参画スタイルを紹介する。

1) うおぬま市民大学(※1、※2、※3)

①ねらい：余暇を活用して、学が楽しさを味わいながら豊かな生活を送れるようにする。

②具体的な活動：通年9回の講義・実技体験形式の講座

(※活動場所については、市内の各施設を巡回しながら行い、子どもから高齢者まで幅広く興味・関心をもって参加することができる内容で検討している。)

③住民の参画：・市民大学運営委員の公募を行い、活動内容を検討するとともに、会の運営にも積極的に関わってもらい「市民意識7項目」の意識付けを図る。
・参加者には講座ごとにアンケートの記入をお願いし、講座内容や運営を振り返ってもらうとともに、集約した結果や特筆事項について参加者に紹介し、紙面を通して会の運営に関わっている意識をもってもらうようにする。



2) 青少年体験活動～魚沼わくわくネイチャー体験クラブ～(※2)

①ねらい：週末や放課後を活用して、青少年および保護者を対象に体験活動を実施し、体験活動の意義とその重要性について周知を図る。

②具体的な活動：週末事業においては、年間20回にわたり、プログラムを実施。青少年の参加を呼びかけ、市内各地で活



動を実施している。

③住民の参画：※魚沼わくわくネイチャー実行委員会が活動内容を企画。魚沼市は活動内容を検討し、実行委員会に対して活動のための支援を行っている。



3) 社会全体で子どもをはぐくむ運動「魚沼市」プラン～魚沼家庭教育実行委員会の立ち上げ～

①ねらい：社会全体で子どもをはぐくむ運動の趣旨に鑑み、魚沼市の行政、地域、家庭、また各サクル等において家庭教育への関心を高めることができるような事業展開を行う。

②具体的な活動：これまで、各地域で行われていた家庭教育力向上のための取り組みについて、魚沼市として方針を定め、ある程度同じ基準で、継続して子どもたちに関わっていくとする活動

③住民の参画：・県で行っている「家庭教育サポーター研修」受講生の中から数名を実行委員に委嘱し、魚沼市が抱える家庭教育の課題や解決の方向性について担当者とともに検討を行っている。
・実行委員は、県で実施されている家庭教育に関わる研修への積極的な参加をお願いし、研修で得た情報を市民に提供していく。また、「家庭教育サポーター研修」の受講を市民に呼びかけるとともに、受講者から、研修を生かす場として実行委員会に参画してもらい、活動の輪が広がるようにしたいと考えている。

(2) 地区公民館事業

地区であればこそ可能な連携が見られる。住民参画とともに学社連携によって大きな効果をあげている事業について、入広瀬地区の事業から紹介する。

1) 佐渡自然体験教室～入広瀬公民館と入広瀬小・中学校の連携～

(H17年度からは、入広瀬公民館・守門公民館の連携)

①ねらい：・佐渡の自然や歴史、文化にふれ、郷土を大切にしようとする気持ちをもつ。

・小・中・高校生の異学年による集団活動や、入広瀬地区と守門地区の児童・生徒の交流を通してよりよい仲間作りや思いやりの心をもつことができる。また、お互いのよさを知り、認め合い、今後の日常生活の中において関わりをもつことができる。

・自分たちで計画を立てて実行することとおして、自主性の芽を育てるとともに達成感や満足感を味わう。

・小・中学校職員と公民館職員が連携を行うことで、参加者が多面的に見て活動の充実を図ったり、学校職員にとっての研修の機会としりする。

②期間：小・中学校の夏期休業期間 8月上旬の平日 3日間

③活動の成果：・小・中学校職員との連携で、集団作りや個々の児童・生徒への対応を的確に行うことができた。

・高校生が支援ボランティアの形で参画することで、自覚をもって積極的に活動する姿が見られる。各地区における「子ども会」的な活動においても、中高生が役割を持ち、事業に参画できるような体制作りを少しずつ呼びかけていきたい。

・小学生は、中学生のリーダーシップを見て集団行動していく上で必要な事柄を学んでいる姿が見られる。中学生は、小学生への指導をとおして、自己の行動規律を作ったり、自主的に活動したりする姿が見られた。

※17年度は、新たに異なる地区の子どもの交流という視点で事業の中に入ってくる。ただ、一緒に遊ぶだけでなく子どもたちの段階で語ることでできる地域性や文化の違いをうまく表出することで、意義のある交流活動にもっていくことをねらっている。

2) 高齢者講座における小学校との交流(※4)～入広瀬公民館と入広瀬小学校の連携～

①ねらい：・高齢者が、子どもたちとの交流をとおして、楽しく生き甲斐をもって活動する喜びを感じることができるようにする。

・子どもたちが高齢者との交流をとおして、高齢者に対する親しみやいたわりの気持ちをもつことができるようにする。

②期日：・年2回(屋外・屋内スポーツ交流1回ずつ)

③活動の成果：・小学生は、交流をとおして、これまであまりかかわりがなかった他地域の高齢者とかかわることで、地域全体に目が向いてきた。ふれあいタイムにおける「高齢者の昔話」から、自分のよく知らない少し昔の時代のことについて興味深そうに聞く姿が見られた。また、学校での社会科学習の際に、ここでつないだ高齢者とのつながりを頼りに、昔の米作りの様子について紙面で聞くという発展的な姿も見られた。

・高齢者は、小学生との話から、「あなたの住んでいる地域には○○さんがいてこんな人だ」という情報を提供する姿が見られた。また、本事業で行った「フロッカーリング」の地域の大会への参加意欲を見せるなど、小学生とのかかわりは高齢者にとって大きな喜びをもたらす事業であるとともに、活動意欲や好奇心を刺激するものだとあらためて感じた。

3) 高齢者講座における中学校との交流～入広瀬公民館と入広瀬中学校の連携～

①ねらい：・高齢者が、中学校の子どもたちとの交流をとおして、楽しく生き甲斐をもって活動する喜びを感じることができるようにする。

・高齢者が、コンピュータを操作する活動を体験することで、達成感や喜びを味わうことができるようにする。

・中学生の子どもたちが高齢者との交流をとおして高齢者に対する親しみやいたわりの気持ちをもつことができるようにする。

②期日：力作を展示する喜びを得るため、文化祭出品をならみ10月に実施(※会場 中学校コンピュータ室)

③活動の成果：・高齢者は、パソコンに関心を示さない方も多い。募集は常に定員を下回り、様々な方法で参加者を募り、実施している。(※定員は生徒数)実際にやってみると、感じていたほど難しくはなく、思っていた以上の作品が完成することに喜びと驚きを感じる高齢者が多い。人生経験豊富な高齢者にとって、触れる機会が少なかつたであろうパソコンに触れることで新しい視点ができることは大変有意義なことであり、大きな喜びであるようである。

・中学生にとっては、高齢者にパソコンの使い方を教え、作品を作ることができるようになるためには、的確な言葉で順を追って説明しなくてはならないため、自己の学習を丁寧に反復するよい機会となる。また、中学生は時間的な問題等からも、公民館事業への参加が少ないため、このような機会をとおして公民館事業に参加することで、参加意欲を高めたり、参画意識をもつてくれたりすれば喜ばしいことである。

3 公民館活動と住民参画の今後

住民は公民館を訪れ、職員に対して自分の考えや事業への希望を述べる。事業や施設を積極的に活用してもらうために、行政は様々な働きかけを行う。これまで、住民にとって「最も身近な行政」であった公民館が、これからも住民にとって親しまれる形でありたい。

また、これまで公民館は、「まちの情報発信ステーション」として、より多くの住民に対して生涯学習への啓発を行ってきた。参加者を増やし、参画者へと高めていくことは長らく課題とされてきていることである。一人でも多くの住民が、参画意識をもって事業運営に携わることで、公民館は「情報の発信ステーション」から「送受信可能なステーション」へと変革を遂げることになる。行政と住民が、住民と住民がお互いに情報を提供しあひながら、それぞれの視点を広げ、深め、取り組む内容が高まっていくことが期待される。事業を開催して参加を待つ形から、参画、またその先にある自主活動を見据えた企画・運営の仕方が問われていくことになる。

参加から参画へのプロセスは簡単ではないし、全てが完全な参画にする必要性もない。自分の意見が事業の運営に反映されることも参画の1つとしてとらえ、一人でも多くの住民に「自主活動の種」を持ってもらい、1つでも多くの自主活動サークルを生み出していく工夫をしていきたい。

①ねらい：週末や放課後を活用して、青少年および保護者を対象に体験活動を実施し、体験活動の意義とその重要性について周知を図る。

②具体的な活動：週末事業においては、年間20回にわたり、プログラムを実施。青少年の参加を呼びかけ、市内各地で活

動を実施している。

③住民の参画：※魚沼わくわくネイチャー実行委員会が活動内容を企画。魚沼市は活動内容を検討し、実行委員会に対して活動のための支援を行っている。

3) 社会全体で子どもをはぐくむ運動「魚沼市」プラン～魚沼家庭教育実行委員会の立ち上げ～

①ねらい：社会全体で子どもをはぐくむ運動の趣旨に鑑み、魚沼市の行政、地域、家庭、また各サクル等において家庭教育への関心を高めることができるような事業展開を行う。

②具体的な活動：これまで、各地域で行われていた家庭教育力向上のための取り組みについて、魚沼市として方針を定め、ある程度同じ基準で、継続して子どもたちに関わっていくとする活動

③住民の参画：・県で行っている「家庭教育サポーター研修」受講生の中から数名を実行委員に委嘱し、魚沼市が抱える家庭教育の課題や解決の方向性について担当者ととともに検討を行っている。
・実行委員は、県で実施されている家庭教育に関わる研修への積極的な参加をお願いし、研修で得た情報を市民に提供していく。また、「家庭教育サポーター研修」の受講を市民に呼びかけるとともに、受講者から、研修を生かす場として実行委員会に参画してもらい、活動の輪が広がるようにしたいと考えている。

(2) 地区公民館事業

地区であればこそ可能な連携が見られる。住民参画とともに学社連携によって大きな効果をあげている事業について、入広瀬地区の事業から紹介する。

1) 佐渡自然体験教室～入広瀬公民館と入広瀬小・中学校の連携～

(H17年度からは、入広瀬公民館・守門公民館の連携)

①ねらい：・佐渡の自然や歴史、文化にふれ、郷土を大切にしようとする気持ちをもつ。

・小・中・高校生の異学年による集団活動や、入広瀬地区と守門地区の児童・生徒の交流を通してよりよい仲間作りや思いやりの心をもつことができる。また、お互いのよさを知り、認め合い、今後の日常生活の中において関わりをもつことができる。

・自分たちで計画を立てて実行することとおして、自主性の芽を育てるとともに達成感や満足感を味わう。

・小・中学校職員と公民館職員が連携を行うことで、参加者が多面的に見て活動の充実を図ったり、学校職員にとっての研修の機会としりする。

②期間：小・中学校の夏期休業期間 8月上旬の平日 3日間

③活動の成果：・小・中学校職員との連携で、集団作りや個々の児童・生徒への対応を的確に行うことができた。

・高校生が支援ボランティアの形で参画することで、自覚をもって積極的に活動する姿が見られる。各地区における「子ども会」的な活動においても、中高生が役割を持ち、事業に参画できるような体制作りを少しずつ呼びかけていきたい。

・小学生は、中学生のリーダーシップを見て集団行動していく上で必要な事柄を学んでいる姿が見られる。中学生は、小学生への指導をとおして、自己の行動規律を作ったり、自主的に活動したりする姿が見られた。

※17年度は、新たに異なる地区の子どもの交流という視点で事業の中に入ってくる。ただ、一緒に遊ぶだけでなく子どもたちの段階で語ることでできる地域性や文化の違いをうまく表出することで、意義のある交流活動にもっていくことをねらっている。

2) 高齢者講座における小学校との交流(※4)～入広瀬公民館と入広瀬小学校の連携～

①ねらい：・高齢者が、子どもたちとの交流をとおして、楽しく生き甲斐をもって活動する喜びを感じることができるようにする。

・子どもたちが高齢者との交流をとおして、高齢者に対する親しみやいたわりの気持ちをもつことができるようにする。

②期日：・年2回(屋外・屋内スポーツ交流1回ずつ)

③活動の成果：・小学生は、交流をとおして、これまであまりかかわりがなかった他地域の高齢者とかかわることで、地域全体に目が向いてきた。ふれあいタイムにおける「高齢者の昔話」から、自分のよく知らない少し昔の時代のことについて興味深そうに聞く姿が見られた。また、学校での社会科学習の際に、ここでつないだ高齢者とのつながりを頼りに、昔の米作りの様子について紙面で聞くという発展的な姿も見られた。

・高齢者は、小学生との話から、「あなたの住んでいる地域には○○さんがいてこんな人だ」という情報を提供する姿が見られた。また、本事業で行った「フロッカーリング」の地域の大会への参加意欲を見せるなど、小学生とのかかわりは高齢者にとって大きな喜びをもたらす事業であるとともに、活動意欲や好奇心を刺激するものだとあらためて感じた。

3) 高齢者講座における中学校との交流～入広瀬公民館と入広瀬中学校の連携～

①ねらい：・高齢者が、中学校の子どもたちとの交流をとおして、楽しく生き甲斐をもって活動する喜びを感じることができるようにする。

・高齢者が、コンピュータを操作する活動を体験することで、達成感や喜びを味わうことができるようにする。

・中学生の子どもたちが高齢者との交流をとおして高齢者に対する親しみやいたわりの気持ちをもつことができるようにする。